

DIによる負の連鎖は断ち切らなくてはならない

武末文男（医師） 青山キャンパス

アイデンティティは、日本ではなじみがない言葉だ。

「自我の確立」、あるいは、「自分が社会にしっかり根ざして未来に向かって成長できること」「社会に対して、自分が何らかの役割を果たしており、自分の生きる意義を明確に認識できること」など、いろいろな説明がある。

そのアイデンティティ形成のために、自分のルーツを知ることは欠かすことができない。

たとえば、中国残留孤児といわれる人たちがいる。彼らがなぜ、大変な苦勞をしてまで自分のルーツである日本に戻ってくるのかと言えば、自分のルーツを知ること、アイデンティティが形成され、苦勞はしても、心の安定が得られるからだ。つまり、人はアイデンティティの確立なくしては、生きていけないのである。

加藤さんが不適切なDIの告知の果てに、木っ端みじんに崩壊したのは、まさに、このアイデンティティだったに違いない。そして、加藤さんは自分自身のルーツを辿ろうとしたときに、再び、匿名による精子提供という壁にぶつかった。

おそらく、DIで生まれた子供にとって、アイデンティティを取り戻す苦しみは大変なものに違いない。自分のルーツを知りたいという魂の叫びが、空を切るのである。

両親も、医療関係者も、その事の重大さに、うすうす気がついている。だからこそ隠す！ 隠さないと、子供は生きていけない、と信じているのだ。

現在の日本におけるDIの実態は、その子自身に過大な負の遺産を追わせる方向で進められている。つまり、出自を隠して、その子が不幸になりそうだからDIの事実を隠す。そうすると何かのきっかけでDIのことを知った子供は、もっと不幸になる。すると、なおさら、DIを隠そうとする。このような負の連鎖を繰り返している。

DIの最大の特徴は、新たな生命の誕生に医療がかかわることである。

その医療が行われる際に、「生まれてくる子どもには、意見を言えない」という矛盾をかかえている。

ならば、せめて一刻も早く、この負の連鎖を断ち切る方向で、つまり「自分の出自を知る権利」を確保した上で、DIを実施する体制を整備しなければならない。